岐阜協立大学論集 55 巻 3 号（2022 年）

新型コロナウイルス感染拡大下における学内で実施した基礎看護学実習Ⅰの学修成果と課題

野網　淳子　（岐阜協立大学看護学部）
古田　桂子　（岐阜協立大学看護学部）
馬場　貞子　（岐阜協立大学看護学部）

キーワード：基礎看護学，学内実習，学修成果，コロナ禍

１．はじめに

新型コロナウィルスの爆発的な流行は、医療体制の危機的状況を生じさせ、それは看護基礎教育にも大きな影響を与えた。特に臨地実習は、感染予防対策として看護学生の受け入れが中止され、貴重な臨床での学びが困難となった。文部科学省（2020）は、新型コロナ感染症に伴う看護師養成所等の臨地実習の取り扱いについて、学内で演習又は学内実習で代替えによって速やかに対処するよう通達した。

本学も 2020 年度の 2 月に基礎看護学実習Ⅰを行うにあたり、各病院の実習受け入れの承諾がなかなか確定されず、さらに県下に 2 度目の緊急事態宣言の発令が予測されたため、実習開始 1 ヶ月前になって学内実習に移行することが決定された。基礎看護学実習Ⅰは、入院患者の生活の場である病床環境についての整えや生活支援の技術がどのように提供されているかを初めて臨地で学ぶ実習である。学内実習の決定にあたり、実習目標を達成するために学内でどのように実習を行うのか、その準備は緊急的であり、限られた資源の中で手探りの状態で検討を行った。

現在、感染拡大の状況は一旦終息したかのように思われるが、今後も感染拡大の再燃や新興感染症によるパンデミックが起こりうることは十分想定される。そのため、学内実習での実践を振り返ることは、実学といわれる看護学の基礎教育に新たな示唆を得ることができると考えた。そこで、今回本学が 2020 年度に実施した基礎看護学実習Ⅰの学内実習の方法と成果および今後の課題をまとめたので報告する。

２．基礎看護学実習Ⅰの概要

基礎看護学実習Ⅰは、１年次生を対象とした１単位の実習科目であり、基礎看護学実習Ⅱと合わせて基礎看護学の臨地実習として構成され、入学１年目の後期（2 月）に実施される。学生は、前期（8 月）に早期看護体験学習の中で 1 日病院訪問を経験し、本実習ではじめて一人の入院患者を担当する。対象のおかれている病院という非日常的な療養環境を理解し、対象のニーズに応じた援助を提供するとともに、対象の人としての尊厳を守ることの意味を理解することをねらいとしている。本実習の実習目的と目標を表 1 に示す。実習場所は 3 か所の病院に分かれ、実施は病院実習 4 日、学内実習 1 日を予定していた。

表１　基礎看護学実習Ⅰの実習目的・目標

実習目的
人権擁護に立った看護実践をするために、医療施設に入院している対象の療養生活を理解し、対象のニーズに合わせた援助の在り方について学ぶ。
実習目標
①対象の療養環境を整える看護のプロセスや、看護師が環境を整える意義について理解し実践できる。 ②医療現場において、人権擁護に立った看護の意味と意義について理解し実践できる。 ③健康障害を持っている対象の援助をするために求められる個別性について理解できる。 ④目標とする看護職になるために、自分自身の傾向や自身に不足している力に気づき、今後の課題と対策を具体的に述べることができる。

2.1　コロナ禍で実践した実習方法

基礎看護学実習Ⅰの臨地実習を全面的に学内実習に切り替えるため、次の方法に変更した。

①学内実習に向け、学生が担当する患者を全員同一の事例とした。そこで、疾患（心不全）、年齢と性別（70代女性）、現病歴などの基礎情報と日々の経過や治療、処置を記載したフローシートを含めたカルテ情報の作成を行った。②事例に基づいた患者の訴え（ニーズ）やその時の身体的状態や状況などを、学生が視覚を通して体験できるように、教員が患者と看護師役割を演じ、5日分の午前の状態観察場面をビデオ教材として作成した。③事例患者の模擬病室を作成し、実習グループの代表者が、ベッドサイドで情報収集や環境整備を行えるようにした。患者は教員が演じ、残りの学生は密集・密接を避けるため、各グループの待機場所（模擬カンファレンスルーム）で、模擬病室の様子をテレビモニター（以後モニターと表記する）に動画を配信し、視聴することにした。④看護援助の実践の場として、各グループの待機場所に2台ずつベッドを配置し、学生が演じた患者に対して各自の計画した援助を提供することにした。⑤実習室入り口にナースステーションを設け、実際の実習場における学修者としてのマナーを修得できるよう実習開始・終了時の挨拶を実施することにした。

2.2　感染対策

本実習では、臨地実習における感染対策に加え、新型コロナ感染防止のための具体的な対策を以下の通り行った。

(1)　学内入館時の体温測定

(2)　健康管理シートと行動チェック

・アルバイトは実習2週間前から実習終了まで禁止とした。

・実習2週間前から健康管理シートに体調と行動を記録し、毎朝教員がチェックした。

(3)　サージカルマスク着用と手指衛生の徹底

・実習室入退室時の手洗いと、実習時間中はアルコール手指消毒薬を個人で携帯し使用した。

(4)　カンファレンスなど意見交流時は、フェイスガードを着用した。

(5)　昼食

・別室の昼食会場で、同一方向を向いて黙食を基本とした。食後は周囲をアルコールシートで消毒し、速やかに実習室に戻った。

(6)　その他

・定期的な換気と、実習終了時に使用した物品や机、椅子等をアルコールシートで消毒した。
・動画を視聴する際は、モニターを複数台用いて学生が分散して観られるように配置した。

2.3　実習スケジュール

2021 年 2 月 1 日からと、8 日からそれぞれ 5 日間、2 期に分かれ 1 グループあたり 8〜9 人で実習を行った。本実習のスケジュールを表 2 に示す。

表 2. 基礎看護学実習Ⅰスケジュール

内容	実習 1 日目	実習 2 日目	実習 3 日目	実習 4 日目	実習 5 日目
午前	・実習オリエンテーション ・各グループで実習個人目標発表 ・患者紹介（カルテ基礎情報閲覧）、看護師の検温時の動画視聴 ・患者への質問整理 ・代表者による模擬患者へのインタビュー (モニター視聴)	・各グループで実習個人目標発表 ・情報収集（フローシート閲覧）、検温時の動画視聴 ・代表者による環境調整の実施 ・グループ討議：「回復を阻害/促進する因子について」	・各グループで実習個人目標発表 ・情報収集（フローシート閲覧）、検温時の動画視聴 ・本日の情報から全身清拭と更衣・オムツ交換の計画修正 ・学生が患者を演じ、教員と一緒に援助実施	・各グループで実習個人目標発表 ・情報収集（フローシート閲覧）、検温時の動画視聴 ・足浴の実施：学生が演じる患者に対して①座位と②床上の場合 ・洗髪の実施：学生が演じる患者に対して①洗髪台と②ケリーパッドの場合	・各グループで実習個人目標発表 ・情報収集（フローシート閲覧）、検温時の動画視聴（症状悪化・床上安静） ・本日の情報からケア内容と方法を全体討議 ・陰部洗浄とオムツ交換の実施 ・全身清拭とシーツ交換の実施
午後	・不足情報の確認（意見交流） ・療養環境のアセスメントシート記入 ・環境調整の計画立案 ・カンファレンス テーマ「初対面の患者から情報収集するときに留意すべきこととは」 ・カンファレンス内容と結論の全体発表 ・各グループで実習の学びと成果の発表	・カンファレンス テーマ「看護師が行う環境調整とは、どんな視点で行うべきか」 ・カンファレンス内容と結論の全体発表 ・身体の清潔保持に関するアセスメントシートの記入 ・清潔の援助計画の立案 ・各グループで実習の学びと成果の発表	・残りの学生で援助実施 ・カンファレンス テーマ「清拭援助において、患者に爽快感や安らぎを与えるにはどうしたらよいか」 ・カンファレンス内容と結論の全体発表 ・各グループで実習の学びと成果の発表	・援助計画の修正 ・カンファレンス テーマ「ケアにおける人権擁護とは、看護者がどんなことに気を払うことか」 ・カンファレンス内容と結論の全体発表 ・各グループで実習の学びと成果の発表	・実施内容を教員に報告する ・カンファレンス テーマ「患者のニーズに合ったケアとは」 ・カンファレンス内容と結論の全体発表
課題	・環境調整の計画立案	・清潔の援助計画立案	・残りの清潔の援助計画立案	・残りの清潔の援助計画立案	

図１　模擬病室と模擬患者の情報取集の場面

図２　待機場所（カンファレンスルーム）と動画による情報収集場面

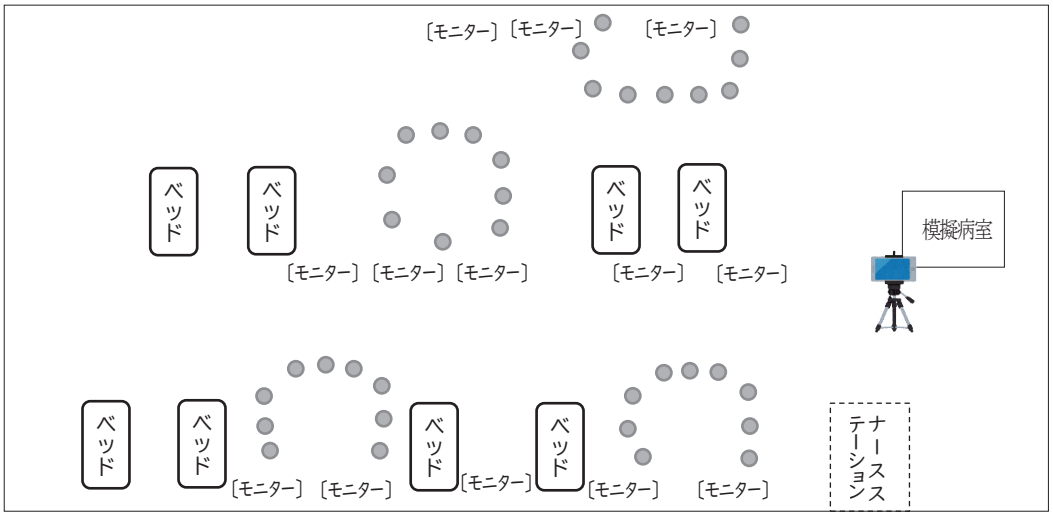

図３　実習室の配置　（● 印はカンファレンスルームにおける学生の座席を示す）

2.4　実習の到達度に関する評価方法

基礎看護学実習Ⅰ終了後に、Micrsoft Forams を用いて無記名自記式のアンケートを行った。質問内容は、実習の成果として、①実習目標の達成度、②理論と実践との統合、③援助における一連の行為の重要性。実習方法の評価として、③動画、④模擬患者、⑤学内実習に対する感想であり、5段階評価（非常にできた・ややできた・どちらともいえない・あまりできなかった・全くできなかった）と、それぞれの理由や意見、感想を自由記述で求め、その結果の分析を行った。

2.5　倫理的配慮

学生に調査の趣旨、調査への参加の自由、匿名性の保障、成績評価には影響しないことをメールにて説明した。研究参加の同意を依頼文、Forms のアンケートの説明文、アンケート送信前の説明文で確認し、送信をもって調査協力の同意とした。なお、事前に所属大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 2020-1）。

３．結果

3.1　回収率

アンケートの回収率は47.1%（32名）であった。

3.2　実習の学修成果について

(1)　実習目標の達成度

①療養環境をアセスメントし、その方法を考え実践する一連のプロセスについて学ぶことは、37.5%が「非常にできた」、62.5%が「ややできた」であった。②看護師が環境を整える意義について学ぶことは、71.9%が「非常にできた」、28.1%が「ややできた」であった。③医療現場において、人権擁護に立った看護の意義について学ぶことは、53.1%が「非常にできた」、43.8%が「ややできた」、3.1%は「どちらともいえない」であった。④健康障害を持っている対象の援助をするために、ニーズに応じたケアのあり方について学ぶことは、31.3%が「非常にできた」、62.5%が「ややできた」、6.2%は「どちらともいえない」であった。

(2)　理論と実践との統合

今回の実習において、実践したことと基礎看護学概論や看護理論で学んだ知識とを結びつけて理解することは、28.1%が「非常にできた」、50%が「ややできた」、21.9%は「どちらともいえない」であった。

(3)　援助における一連の行為の重要性

１つのケアを行うためには、説明と同意、援助中の声掛け・観察、終了時までが一連の行為として重要であると理解することは、90.6%が「非常にできた」、9.4%が「ややできた」であった。

3.3　実習方法の評価について

(1)　動画について

受け持ち患者を紹介した動画は患者を知ることについて、53.1%は「非常に役立った」、40.6%は「やや役立った」、6.3%は「どちらともいえない」であった。選択した理由については、「患者の状態が分かりやすかった」が多く、逆に「音声が聞き取りにくかった」「動画では撮影範囲に限界がある」という意見もあった。毎朝の患者の様子を伝える動画は、本日の援助を行う上で、56.3%は「非常に役立った」、40.6%は「やや役立った」、3.1%は「どちらともいえない」であった。選択した理由は、「前日と比較できる」「変化が分かった」「ケア方法を考えるのに役立った」が多かった。

(2)　模擬患者について

教員が演じた模擬患者は、患者のニーズに応じた援助を学ぶために、65.6%は「非常に役立った」、31.3%は「やや役立った」、3.1%は「どちらともいえない」であった。選択した理由は、「臨場感のある場面からの学び」「患者とのコミュニケーションに役立った」が多く、「模擬患者へのインタビュー時間の不足」という意見があった。

学生がインタビューや環境調整を行なっている場面をテレビモニターで確認できたことは、68.8%は「非常に役立った」、25%は「やや役立った」、6.2%は「どちらともいえない」であった。

3.4　学内実習に対する感想

感想の中で実習方法として良かったことをまとめた結果、次のような意見が得られた。「患者役割での学びと成長を実感した」「模擬病室でのリアルな体験から学べた」「意見交流によっていろいろなケアの方法が学べた」「知りたいときに動画から情報が得られた」「カンファレンスが効果的に活用できた」であった。

実習方法として良くなかったことは、「臨地ではないため緊張感が欠けた」「援助時間が不足した」「ケアの途中で指導してほしくなかった」「臨地実習とのギャップに不安がある」であった。その他感染対策については、「ケア・会話時の距離が気になる」「密になるときがある」「フェイスガードでは聴き取りにくい」「通学時の感染の不安」「学外行動での感染に対する不安」があった。

４．考察

4.1　学修成果

今回の実習でのアンケート結果からは、実習目標に対して学生はほぼ理解できたとする回答が多かった。これは、臨地に近い状態を作り出すために動画を作成し、患者の療養生活や状態をイメージできる環境を作り、そこからケアの在り方を考えられるようにした意図が効果的に働いたと評価できる。動画は「イメージしやすい」というメリットがあり、実習の課題となる患者の状態を動画でイメージすることができたと考える。しかし、「撮影範囲に限界がある」という意見もあった。それは、教員が学ぶために必要と考えた情報を操作して編集しているため、学生が抱く様々な関心に十分対応できていなかったことが推察される。また、学生は動画のリアリティーを評価しているが、実際に患者が置かれた環境の空気感までは再現することはできず、患者役を演じている教員にも病態の再現には限界があった。

「ケアの途中で指導してほしくなかった」という学生の声は、自分たちが計画した援助を最後まで実施したいという意思が考えられる。しかし、臨地において学生が実施する際、患者に危険が生じたり、明らかに安楽が阻害されると予測された場合には、実習指導者や教員はそれを防ぐため援助に介入し、時には中断や交代が行われることがある。学生は、学内実習で自分たちの技術を高めようとするニーズが高いと、その援助は学生本位の実施になりやすい。臨地では患者が主であり、援助の承認も患者の意思と病態に左右されるものである。学内実習は、技術習得の場だけでなく、臨地での緊張感や責任感も養うことが求められる。そこで教員は、援助中に指導が必要な場合は、これらの理由を含めて丁寧に説明する必要があると考えられる。

模擬患者を用いて援助の説明と同意、援助中の声掛け、終了時の確認までの一連の過程の重要性が理解できたということは、援助を通してコミュニケーションの方法を学べたといえる。井村ら（2021）は、基礎看護学実習における患者とのコミュニケーションについて、プレッシャーや困惑を感じているというが、言い換えると患者とのコミュニケーションに対する関心も高いといえる。そのため、今回学内実習においても援助を通したコミュニケーションの在り方を学ぶことができたのは大きな成果と考える。

4.2　課題

動画教材については、できるだけ入院患者の状態が分かるようにリアリティーを充実させることが求められる。学生に考えさせたい情報のみの提示ではなく、できるだけ多くの情報と臨床への関心と学修意欲を満たすような再現性の高いものを作成することが求められる。それには、学内だけの物的環境での再現には限界があるため、臨床と連携して、患者の情報を動画で撮影して教材を作成することも有効と考えられる。今回は人流の観点から、実習指導者の参加を検討することができなかったが、臨床との技術の差に

ついては、現場の実習指導者との意見交流をはかるため、学内実習への参加や臨地とのオンライン交流も今後検討していく必要があると考えられる。

５．おわりに

新型コロナウイルス感染拡大下での学内実習を経験し、様々な状況下でも学修成果が得られるような実習方法を平常時から準備しておくことと、臨地との連携を図っておく必要性を感じた。それは通常のシミュレーション演習でも活用できる方法でもあるため、今後ともより一層工夫を重ねていきたい。

参考文献・引用文献

文部科学省 (2020)：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告　看護学実習ガイドライン，2020/3/30
https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf（last accessed 2021/11/4）

文部科学省（2020）：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所 及び養成施設等の対応について，2020/6/1
https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（last accessed 2021/11/4）

文部科学省（2021）：新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書，2021/6/8
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（last accessed 2021/11/4）

井村香積，高田直子，新井龍ほか (2008)：基礎看護学実習Ⅱで体験した看護学生の思い　患者とのコミュニケーションを通して，滋賀医科大学看護学ジャーナル，6(1)，46-49